

主君から嫌われた人の話

上句、馮衍は大志を抱いていたが、認められず、郷里に帰り不遇でいた。

原文

後漢馮衍字敬通、京兆杜陵人。幼有奇才。博通群書。王莽時不肯仕。常好倣儻之策、時莫能聽用其謀。衛尉陰興等以外戚貴顯。深重衍、遂與交結。由是爲諸王所聘請。尋爲司隸從事。光武懲西京外戚賓客、故皆以法繩之。由此得罪而歸故郡、閉門自保、不敢與親故通。顯宗即位、又多短衍以文過其実。遂廢於家。培墮於時。然有大志。居常慷慨歎曰、衍少事名賢、經歷顯位、懷金垂紫、揭節奉使、不求苟得。常有凌雲之志、三公貴千金之富、不繫於懷。貧而不哀、賤而不恨、猶庶幾名賢之風、修道德於幽冥之路、以終身名、爲後世法。

（口語訳）

後漢の馮衍は字を敬通といい、京兆杜陵の人である。幼少の頃から、すぐれた才能があり博く群書に通じていた。王莽が政権を専らにしていた時は、その汚濁の人格を憎み仕えようとしなかった。しかし、平素は人に優れた大志を持ち遠大なる画策を好んでいたのであるが、時の要路にあたっていた人は彼を認めず、その策を聞き用いる者がいなかった。しかし、衛尉（宮門内の警尉を司る）陰興等は王室の外戚で貴顕の身分であったが、深く彼を重んじ交わりを結んだ。そのため諸王より礼を厚くして招かれるようになり、後に司隸從事となった。ところが、時代が移り光武帝の世となると、帝は長安で陰興ら外戚が賓客を集め非議を計つたのに懲り、これに加担した者は皆法に照らし処罰した。そこで彼も罪を得たが、後、許されて故郷に帰ってきた。それより彼は門を閉じわが身の保全を講じ、親戚や古馴染みとも往来しなかった。顯宗（明帝）が